

2020. 6. 28 第四主日礼拝

I コリント 1:18-31 「キリストに現された神の知恵」

## 聖書

18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちに  
は神の力です。

19 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と  
書いてあるからです。

20 知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の  
論客はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたで  
はありませんか。

21 神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませ  
んでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救う  
ことにされたのです。

22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。

23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人  
にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、

24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、  
神の力、神の知恵であるキリストです。

25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

26 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者  
は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。

27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、  
強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。

28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下され  
ている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。

29 肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないようにするためです。

30 しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キ  
リストは、私たちに神からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになら

れました。

31「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりにするためです。

## はじめに

パウロが扱わなければならなかったコリント教会の最初の問題は、教会内の分裂・分派でした。パウロ派、アポロ派、ケファ派、キリスト派の4派が互いに争うような状態に対して、キリストが分割されたわけではないし、パウロが十字架にかかったわけでもない、またパウロの名によってバプテスマを受けたのでもないと言ひ、皆がキリストの十字架に心を集中して一致してくださいと勧告しました。

キリストの十字架の優位性を人間の知恵と神の知恵という視点から展開したのが今日の箇所です。パウロは3章で再び分裂の問題を扱っていますので、1:18から2章までは本題から脱線するような形となっています。パウロはキリストの十字架にどんな思いを込めて、福音宣教に当たっていたのでしょうか。私たちも十字架に対する思いを受け止め、そのすばらしさを見つめたいと思います。

## 1. 十字架は神の力

「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」(18節)。十字架のことばとは、イエスさまの救いを伝える福音宣教全体を意味するものですが、福音に対して人々の反応は二分されると言っています。ある人は「愚か」と言い、ある人は「神の力」と言うのですが、なぜ分かれてしまうのでしょうか。その原因が人間の知恵の偏重にあるというのです。もし人間の知恵(哲学、思想、知識)によって十字架の意味がわかるのなら、もっと多くの人がイエスさまを救い主として信じているはずです。異教の日本の中であっても、キリストの十字架のことは学校で学びますし、少し興味ある人は学問として探求しキリスト教の歴史や知識を持っています。多くの方はキリスト教絵画や賛美歌を通してキリスト教文化

にも触れています。キリスト教系の幼稚園や学校を出ている人もたくさんいます。でも、その人たちのほとんどはイエスさまを信仰の対象としては見ていません。否、イエスさまは罪人の身代わりとなって十字架で死なれた救い主であり、死後三日目に復活をして今も生きていと語ろうものなら、“バカバカしい、変な宗教に引き込まれる前に関わらないでおこう”と途端に心を閉ざしてしまいます。その人たちにとって十字架のことばは、聞くに値しない愚かしいものとなり、その行き着く先は滅びです。

それに対して、福音を受け入れ信じる者は、魂の救いを得て神の恵みの中に生きる者とされ、神さまの御力によって与えられた地上の生涯が祝福されるのです。祝福された生涯とは、何の問題もないバラ色の生涯になるという意味ではなく、神さまの恵みと助けによって問題を乗り越え勝利していくのであり、その行き着く先が人生の勝利者として神の国（天国）に迎えられるのです。それゆえに、イエスさまの十字架を信じて魂の救いを得て歩む者の歩みそのものが神さまの御力の現れとして証されるのです。十字架のことばに対する二種類の反応は、真逆の結果を生み出し、人生とその帰結である永遠を決してしまうのです。願わくは、すべての人が滅びではなく、救いを選び取ることができるように祈ります。

## 2. 人の知恵と神の知恵

続いてパウロはこの世の「知恵ある者」「学者」「論客」に対する挑戦を投げかけています。ギリシャの哲学者やユダヤの律法学者、アテネを中心とした議論家たちを指して、「神は、この世の知恵を愚かなものにされた」（20 節）と述べ、人間の知恵によってはキリストを見い出すことはできないのであって、それが「神の知恵」なのだと言っているのです。先ほどの述べましたように、人々は十字架のことばを愚かと退けますが、その退けた愚かなことばである十字架こそが人を救う唯一の道であり、それ以外に人が救われる道はこの世の中には存在しないのです。「それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。」（21 節）。

キリスト教が届ける救いは、小さな子どもから大人まで、だれでも信じるだけで救われます。ある5歳の女の子がつい出来心からお店でガムを自分のポケットに入れてしまい、そのことを罪として示されイエスさまにごめんなさいをして救われた証を聞いたことがあります。ある人は高齢になり息を引き取る間に人生の中で犯した罪をお詫びして救われた方もおられます。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ 10:10)とありますように、救いを自分のものとして頂くためには、「イエスさまを信じます」と言うだけです。これ以上簡単なものはありません。この一番単純なことを多くの人が一番難しいことだと言います。だからイエスさまは幼子のような単純な心で受け入れることが大事だと言われました。

パウロは救いに対する人々の対応を3パターンで紹介しています。一つ目はユダヤ人にみられる奇蹟(しるし)偏重主義です。神さまは奇蹟や不思議な体験を通して御力を現されると信じているからです。これは、神仏による不思議な体験・経験・結びつきを大切に人が当てると思えます。二つ目はギリシャ人に見られる理性偏重主義です。理性や知識で納得できることしか受け入れない人たちです。三つ目はキリストこそが「神の力、神の知恵」(24節)であると信じてイエスさまに拠り頼んで生きる人たちです。前の2パターンの人たちは、福音は「ユダヤ人にとってはつまづき、異邦人にとっては愚かなこと」(23節)と映っているので、イエスさまを救い主として見るのが難しいのです。しかし、イエスさまの救いはすべての人に向けられていますから、今は救いに目を向けることが困難な人もいつかイエスさまに目を向ける日が来ると信じて、祈り待ち望みましょう。

### 3. 召された者への勧め

先の三番目の人たち、すなわち「召された人」への勧めを見て締め括ります。「召された人」とは、今救いを得ているクリスチャンだけを指しているのではありません。イエスさまはすべての人を救いに招いておられます。その

招きに応答した人が「召された人」です。「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」(26 節)とありますように、当時イエスさまを信じる人たちは知識層や富裕層、身分の高い層がいなかったわけではありませんが、圧倒的に社会的に弱い人たちでした。

今の時代、特に弱さを抱える方々を愛をもって受け止める社会でありたいと願います。教会は社会の縮図ですから、弱さを抱える方々を分け隔てなく受けとめ、共に生きて行きたいと思えます。そういう意味でインマヌエル豊田教会の「バリアフリーチャーチを目指す」という理念はすばらしいです。子どもも大人も、障がいある人もない人も、若い方も高齢の方も、病める方も健康な方も、皆が迎えられる教会です。私たちの教会は今 45 年目の歩みの中にありますが、開設から今日まで教会の根底に、弱さを抱える方々とともにという理念が流れています。これは、他の教会ではなく、「インマヌエル豊田キリスト教会」に与えられた神さまから賜物であり使命だと理解しています。後 5 年で 50 年の歴史を刻むこととなります。バリアフリーチャーチを皆さんと一緒により具体的に、より現実的に実現させていきたいと祈る者の一人です。

本題から外れましたが、神さまはどのようにして弱さを抱える人たちを召されたのでしょうか。二つの理由がありました。一つは「神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。」(27 節)。もう一つの理由は、召された者が自分を誇らないためです。自分はイエスさまによって救われた者、召された者であると、自分には救いに選ばれる理由があったのだと誇ることがないためだということです。「有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」(28 節)とあり、召された私たちは取るに足りない、無に等しい者であり、そのような者に神さまは目をかけてくださったのです。これは、社会的

に高い地位にいる方が信仰を持たれても同じです。私たちは等しく神さまの前には取るに足りない者であり、無に等しいものです。その意識が失われて、自分を誇ることがないように戒めています。もし誇るとするなら、自分を誇るのではなく、無に等しい私のような者に目を留めてくださったイエスさまを誇るように。「誇る者は主を誇れ」(31 節)に徹する者でありたいと願います。マリアは言いました。「この卑しいはしために目を留めてくださった」(ルカ 1:48)。パウロも言いました。「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に」(エペソ 3:8)。旧約のダビデも言いました。「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは。」(Ⅱサムエル 9:8)。マリアもパウロもダビデも自己卑下しているわけではありません。ほんとうに神さまの前には小さな取るに足りない者であることを心底認めてへりくだっているのです。へりくだる者に恵みを注がれる神さまの御名をほめたたえます。私たちも主を誇り歩むなら、ますます恵まれて歩むことができます。

## まとめ

教会の分裂論争から一旦目を離し、イエスさまの十字架のすばらしさに目を向けました。十字架のことばは、信じる私たちには神の力です。今週も神さまの御力に支えられて歩みましょう。イエスさまの御救いは、人間の知恵や探求、知識や経験によって得られるものではありません。神さまからの恵みのプレゼントですから、信仰によって信じて受け取りましょう。救いはすべての人に届けられていますから、個人的に応答して受け取って頂きたいと願います。「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」これにアーメンと和すことができる方々がさらに起こされることを願いつつ、神さまの祝福をお祈りいたします。